佳作

どんな猫でも

六本木中学校　竹内　英一

「ニャーニャー」「あれ？またいる…」僕の家の向かいは墓地だ。そのせいか、その近辺には野良猫がよく住み着いている。

たいてい野良猫というのは、警戒心が強く、その日の食料をやっと獲っているというイメージがあると思う。しかし、その墓地にいる野良猫は、人様の家の門前で日向ぼっこをしたり、お腹が地面にくっつくほど太っていたりするのだ。

僕はその理由を探るために、時々墓地の周りを散歩したりした。そして、その答えを見つけた。

墓地の角の所に、ビール瓶の回収箱がある。その裏側に、猫の餌用のお皿が置いてあった。そしてそのお皿に、若い女の人が無造作に餌を落としていった。猫は待ってましたとばかりに、餌に食らいついていく。その女の人は、墓地の中にも入り、お墓の前にも餌を落としていった。

数日後、また来た女の人に、僕は話を聞いてみた。「どうして野良猫たちに、餌をあげているのですか？」と。そうすると女の人は僕の心に残る話をしてくれた。

「確かにこの子たちは野良猫だから、皆から見放される存在かもしれません。けれど、そんな野良猫たちだからこそ、餌をあげて、見守ってやりたいのです。」

僕はその言葉を聞いたとき、ハッとさせられ。今まで、野良猫は可愛いと思っていたけれど、それ以上の感情は持たなかった。しかしここに、それ以上の思いで、本気でこの野良猫たちを守りたいと思っている人がいる。その話を聞いたあと、餌を食べている野良猫の顔は、心なしか嬉しそうだった。

世界には、何種類の猫がいるのだろう。何千種類？何万種類？いや、もっといるかもしれない。そのうちの一握りはＩＣＵＮ（国際自然保護連合）で絶滅危惧種などに指定され国定公園の中で大事に守られている。代表的なのはイリオモテヤマネコだ。世界中でも、日本の西表島にしか生息しておらず、その数は数百匹と言われており、森の中で静かに生活している。

しかし、なぜイリオモテヤマネコは大事にされているのに、全国の野良猫たちは目の敵にしているのだろう。人に襲われる危険、車にひかれる危険などにさらされながら、その日その日の食料を命がけでとらなくてはならないのは、どうしてだろうか。

確かにイリオモテヤマネコも、森の中で頑張って生きていると言う人もいるかもしれない。けれど、僕は野良猫の頑張りを認めてやりたい。

世界には、何種類の猫がいるのだろう。今僕の目の前で餌にありついている、この野良猫の種類を知りたくなった。